

[研究ノート]

アメリカにおける女子教育のはじまりと発展

本 城 精 二

序

男女が平等である事は自明のことである。教育の面においても男女の格差なく、平等であることは今日では当たり前である。現在、教育の民主化は先進国では当然である。しかしそのような社会に至るまでには長い道のりがあったはずである。今や男女共同参画社会の時代である。しかし、過去には男女の相違に対する意識が強く、男は男、女は女という性差が日常生活のすべてに及んでいた時代があったことは事実である。そのような時代には教育の面においても男女の性差がみられるのである。

現在のアメリカは政治・経済・科学・軍事、その他ほとんどすべての面においても世界第一級の国である。歴史と伝統がないことを除けば、教育においても最も誇り高き国である。現代のアメリカの教育はほとんどすべての分野で世界最高水準であろう。そのアメリカで女子教育がどのように始まり、どのように発展したのであるだろうか。教育上の男女の差違がどのような状態だったのか、またそれがどのように縮小していったのかとい点に目を向けてみたい。

アメリカの教育は17世紀より始まっている。特に男子の教育は非常に重要視され、早くから高等教育が行われていた。その後、女子教育も行われるようになったが、やはり教育内容や教育の理念に男女の性差が見られるのである。比較的最近まで女性の「場所」は家の中だ、という社会通念があったアメリカで「女」としての独特の教育が行われた時代もあった。つまり炊事、衣類の用意や洗濯、家の掃除というような、いわゆる家事をするのが「女」の役割だというように考えられていた時代があった。そのような社会通念が教育によってどのように変化していくかという問題は非常に興味深い。

この小論においてはアメリカにおける女子教育がどのように始まり、どのよ

うに進展していったかを論じたい。女子教育のはじまりから、便宜上時代を限定して20世紀初頭までの教育について論述したい。

I. 女子教育のはじまり

まず最初にアメリカが独立するまでに女子の教育は行われていたのだろうか。女子教育はいつ頃始まったのだろうか。植民地時代には次世代の牧師を養成するために男子の教育が行われていた。女子の教育は概してどこの国でも軽視されたものである。1776年の独立以前の女子教育にまず目を向けてみよう。そして独立後、アメリカが先進国の仲間入りするまでの時代、つまり近代科学と産業が発達し、世界第一級の国になるまでの時代、女子教育はどのような状況だったのであろうか。アメリカの歴史書の中から女子教育に関する記述や項目を拾い挙げて、アメリカにおける女子教育の発展について論述してみよう。

まず *American Eras: The Revolutionary Era, 1754-1783* から、興味深い次の内容を要約して提示しておきたい。

〔要約〕18世紀、女性フォーマルな教育を受けていないが、これは何の教育も受けていないということではない。当時の女性は家事や子育てが主な仕事であったために、それらに必要な調理の方法、食料の加工や保存といった知識が求められた。また家族の衣類を作り保健衛生のための知識も必要であった。さらに出産に関する知識も必要であり、時には助産婦の手伝いをする必要もあった。女子は男子と同様に学校で学ぶこともあったし、中には男子とともに上級の学校に行く者もいた¹。

以上のような記述が、上にあげた図書の“Education of Women: Women's Roles”の項目の中に記されている。この要約の中に示されているように、意外なことに18世紀のアメリカで、女性にも教育は行われていたのである。

18世紀のアメリカは教育文化に関してはかなり地域差があったようである。識字率の地域差がそれを物語っている。教育と識字率は密接に関係しているために、地域によって識字率も大いに異なるのである。上に掲載した図書によれば、1760年までにニューイングランドの男性の識字率は80%に達してお

り、ボストンの女性は65%、農村部の女性は30～40%であったと記されている²。さらに同書には次のような興味深い記述がある。

In North Carolina only about 33 percent of women could sign their names before the Revolution. By this time at least 80 percent of men in all the colonies could sign their names³.

この引用が示す通り植民地時代のノースカロライナでは僅か33%の女性しか署名できないのである。多数の女性が自分の名前すら書けないのである。また植民地全体でも男性の80%しか自分の名前を書けないのである。自分のサインができないということは、文字を読むことも書くこともできないということの意味している。アメリカの文学作品にも時々文字の読み書きができない人物が登場することがある。また21世紀の現在においても英語は話せるのに、英語の読み書きができない国民が僅かながらいるというのも事実である。

マサチューセッツでは早くから公的教育が始まっていた。1789年には義務教育がマサチューセッツの一部で始まっている。早くから男子の教育が行われ、その後女子も学校教育を受けていたことは歴史的事実である。マサチューセッツでは教育の先進地ということもあり、男女ともに識字率が他の植民地より高いというのも納得できる。

次に独立以前の女子教育に関してフィラデルフィアの事例に目を向けてみよう。

1754 Anthony Benezet opens the Morning School for Girls in Philadelphia so that young women can learn reading, writing, arithmetic, and English grammar⁴.

この項目が示すように、フィラデルフィアでは独立以前に女子に特化した教育が芽生えているのである。そして女子に読み書きや算数、文法を教えていたのである。1754年と言えば日本ではまだ江戸時代である。そのことを考えればアメリカの女子教育が一部の地域ながら、早くから重視されていたことが推測できる。

1771 The Massachusetts Poor Laws are revised to allow females to be taught writing as well as reading. (*AE, 1754-1783*)

これはマサチューセッツにおける女子教育に関する項目である。マサチューセッツでは1789年に義務教育が始まっている。マサチューセッツは後年のアメリカ社会を考えると、文化、教育、科学等においてアメリカを先導する「牽引力」を持っていたと言える。そして文化・教育の先進地である。

マサチューセッツ以外にも比較的早くから義務教育が始まっていた。ニューヨークでも意外と早く義務教育が始まっているのである。*American Eras: The Revolutionary Era, 1783-1815*によると次のように記されている。

New York passed a compulsory education law in 1665 which required all children and servants to be instructed in law and religion as well as reading, writing, and arithmetic⁵.

このようにニューヨークでは1665年というアメリカ史上非常に早い段階ですべての子ども達に義務教育を施すという法律ができていたのである。読み書き、算数の他に宗教や社会のルールである法律まで教育内容に入っているのである。読み書き算数は日常生活上不可欠なものである。また社会生活を営む上で宗教は当時としては大変重要であった。また社会生活上法律の知識も欠かすことはできないものである。それらはすべて生活する上で非常に大事な知識ではあるが、それらを学校で教育していたということ自体注目に値する。17世紀という時代を考慮すれば、そのような教育内容は非常に画期的なことであると言えるだろう。

アメリカでは男子の高等教育が早くから始まっているが、やがて男女が一緒に学ぶ共学も始まっている。もちろん高等教育の共学も実現している。それでは女子のみに特化した女子のための教育機関、つまり女子校はどのように実現したのだろうか。

18世紀以降の女子教育に関する項目を年代順に *American Eras* から引き出し列記してみよう。

- 1791 Sarah Pierce opens a school for girls in her home in Litchfield, Connecticut. (*AE, 1783-1815*)
- 1808 The Female Charity School is opened in Fredericksburg, Virginia. (*AE, 1783-1815*)
- 1814 Emma Hart Willard organizes Middlebury Female Seminary in Vermont. (*AE, 1800-1860*)
- 1833 Catharine Beecher establishes the Western Female Institute in Cincinnati. (*AE, 1800-1860*)

このように列記するとアメリカの東部のみならず各地で女子教育の施設が設立されていることが判る。1791年のコネチカットの学校は私塾のようなものであろうが、18世紀に女子教育に目を向けたことは高く評価してよいだろう。アメリカはもともと東部の大西洋に面したところに植民地が展開され、そこから発展していったために、東部で早くから教育活動が進んでいったことは容易に推測できる。そしてここに示されているように、19世紀には中西部にまで女子のための教育施設が設立されているのである。

独立の際13州で始まった合衆国は、その後西漸運動にともなって西へ西へと開拓が進み、19世紀の初頭には中西部まで開拓が進んだ。中西部は東部と比較すれば文化的後進地であると言える。学校が設立されるということは、そのような中西部にまで教育の必要性が認識されていった証である。特に、軽視されがちな女子教育に着目したところに大きな意義がある。社会全体における女性観を変え、より近代的な社会にするために教育の果たした役割は大きいだろう。そして社会における女性の立場を向上させるために教育は大きな役割を果たしたと言えるだろう。

- 1851 The Sisters of Notre Dame establish a boarding school for girls in San Jones, California. (*AE, 1800-1860*)

この項目は女子の寄宿学校をカリフォルニアに開設したというものである。カリフォルニアは1850年に合衆国のひとつの州として承認されているが、その翌年に修道院の前身と思えるものができているのである。

このように女子教育がますます拡大充実しているのである。19世紀にはもちろん共学も含めてアメリカ各地で公的教育が実施され、どんどん教育環境が整っているのである。そして女子の高等教育も時代と共に増大していくのである。

II. 女子高等教育

アメリカ各地に女子のための教育機関が設立されているのであるが、高等教育機関はどのような状況であっただろうか。男子の高等教育機関は早くから整っていたが、女子のための高等教育機関に注目してみよう。

- 1852 Anna Peck founds Rockford Seminary for women in Illinois.
Catharine Beecher founds Milwaukee Female College in Wisconsin. (*AE*, 1800-1860)
- 1853 Lindenwood College for women is founded in St. Charles, Missouri. (*AE*, 1800-1860)
- 1865 Vassar Female College is established in Poughkeepsie, New York. (*AE*, 1850-1877)

これらの項目をみると各地で女子のための高等教育機関が開設されているのが判る。19世紀中葉にこのような女子専門の高等教育機関が設立されているのである。しかも東部の比較的古くに建設された大きな都市ではなく、開拓されてまだ歴史の浅い中西部や、ニューヨーク州の（当時としては）比較的片田舎の小さな町に女子の高等教育機関が設立されているのである。1852年にはイリノイ州とウィスコンシン州、1853年にはミズーリ州に女子高等教育機関が開設されているのである。

上に挙げた高等教育機関は確かに女子のためのものではあるが、その頃には言うまでもなく共学の高等教育も実現している。参考のために次のような事例を示しておこう。

- 1853 Antioch College opens in Yellow Springs, Ohio, as a coeducational

institution, following Oberlin, the nation's first coed college (1838), and New York Central College (1849). (*AE, 1850-1877*)

1873 Boston University is founded as a coeducational institution. (*AE, 1850-1877*)

このように共学の学校を含め、各地で女子の高等教育が行われているのである。しかし後述するように教育における男女格差の問題は解決することなく、新しい世紀に向けて続くのである。

次の項目はニューヨーク州のエルマイラ・カレッジについての記述である。

1859 Elmira College in New York becomes the first female college to award bachelor of arts degrees to women⁶. (*AE, 1850-1877*)

この項目が示すように当大学は女性に学士号を授与したアメリカ最初の学校ということである。このように女子教育は確実に発展していることを物語っている。女子教育が発展していることと、社会や家庭における男女差がなくなったということとは別である。男女差の問題は常に未解決のままであると言っても過言ではない。男女差の問題というのは家庭における問題と、社会における問題と、大きく二つに分けて考えなければならない。家庭内における男女の役割分担という問題と、社会における男女の差別待遇という問題である。就職、昇進、給与といった処遇が男女で格差があったという事実がどのように改善されていったかという問題である。

次に女子教育の充実の度合いをみるために女子の就学率について考えてみよう。

1897 The percentage of girls in high schools in the country is 57.64. (*AE, 1878-1899*)

1897 Nearly one-third of students who attend colleges and universities are women. (*AE, 1878-1899*)

これらの数字が示すように19世紀末に女子高校生の就学率は57%を越えて

いるのである。そして大学生の3分の1は女子であると示している。20世紀になる直前であるが女子の就学率はかなり高かったと言えるだろう。

In 1892 both Stanford and the University of Chicago actively recruited women as undergraduates, graduate students, and faculty members⁷.

この引用に興味深いことが示されている。スタンフォード大学もシカゴ大学もアメリカを代表する名門である。それらの大学が積極的に女子学生や女性教員を受け入れているのである。それも就学率の向上や高等教育を促すことに繋がっていたのかもしれない。

女性の教育について次の引用文を提示しておこう。*American Decades* の“Women in Higher Education”の項に次のように女性の高等教育の意義が示されている。

Only a minority of students attending American colleges in the years 1900-1909 were women, although three-quarters of all colleges and universities were coeducational at the time. Just 35 percent of undergraduates were female in 1900, and only 39 percent were female in 1910⁸.

このように女子教育は着実に拡大していった。19世紀末から20世紀に移り、女子の就学者は増大している。そして女子の高等教育も時代とともに拡充していった。社会が変化し、社会風潮あるいは社会通念が変化するにつれて女子教育も拡大し、内容的にも充実の道を辿っている。

Ⅲ. 女子教育の社会的評価

実社会で女性の高学歴をどのように評価されていたであろうか。社会における女性の地位に関する項目に目を向けてみよう。次の項目は教育界における女性管理職の事例である。

1889 Julia Richmond is the first woman and the first Jew to be appointed a

district superintendent of schools in New York City. (*AE, 1878-1899*)

これはユダヤ系女性がニューヨーク市の地区教育長に任命されたという例である。女性の社会進出が珍しかった当時、女性が教育の世界で管理職になるということは社会の注目を大いに浴びたことであろう。20世紀中頃までは「女のポジションは家の中」という保守的な考えが強く、女性が社会進出すること自体が珍しい時代である。20世紀も後半になれば女性の校長や、会社の重役も珍しくはない。あらゆる職種で女性の社会進出が進み、管理職にも就いている。しかしそのような風潮を迎える以前に、20世紀前半に少しずつ女性の社会進出する傾向が始まりかけていたとみるべきだろう。

女性の管理職として活躍する件についてももう一件例示しよう。

1909 Ella Flagg Young becomes the first female superintendent of an urban school system when the Chicago Board of Education appoints her to the post. (*A. Decades, 1900-1909*)

これはシカゴの教育長としてはじめて女性が任命されたという事例である。いくら女子教育が拡充したといっても、まだまだ保守的な時代である。19世紀から20世紀になったとしても、社会通念は急激に変わるものではないだろう。そのような時代に女性が教育長に任命されるということは異例中の異例であろう。それ以後にも他の都市で女性が教育長に任命された例はある。20世紀初頭という時代だから女性の管理職が社会の注目を集めたことは間違いない。

1894 Martha Carey Thomas is selected as president of Bryn Mawr College and begins dispelling doubts about women's intellectual capacities. (*AE, 1878-1899*)

この事例は女性が大学の学長に選ばれたというものである。19世紀という時代を考慮すれば超進歩的と言えるのではないだろうか。当時女性のポジションは家の中というのが社会通念であった。女性は家にいて食事の用意と後かたづけ、家の掃除と衣類の洗濯といった家事をするというのが普通であり、当然の

こととして受け入れられていた。女性が教育長とか大学の学長になるというのは破格の社会進出であり、社会の注目の的になったことであろう。

これらは女性の社会進出の例である。21世紀の現在ならば上述のような例は容易に社会に受け入れられるであろう。しかし当時の社会状況を考えると女性の社会進出は極めて異例であったと言えよう。上の1894年の項目が示すように、女性の知的能力を疑う声に対する反論が出されている。女だというだけの理由で知的能力が劣っているはずは決してないが、当時はそのような声があったことを物語っている。科学的根拠なく女性の知的能力を低く評価していた当時の社会通念であったからこそ、上記の知的能力の高い女性が声明を出している意義は大きい。そのような社会通念はすぐに改革されることはないが後年徐々に変化し、女性が社会的に高い地位に就き、女性の能力が正当に評価される時代が後に訪れているのである。

教育観は時代と共に変化する。時代の進化とともに社会の様相が変化し、それに伴って女性観も変化していく。そして女子教育に対する社会的評価も異なっていく。育児や家事は女の仕事という社会通念があった時代もある。しかし子どもを育てるのは女性のみではなく、男女共同で行うものであることは言うまでもない。しかし小さな子どもに与える影響は女性の方が大きい。このため女性が高い知性や徳性を備えておくことは大事である。そのためには教育が非常に重要である。社会が近代化するにつれて女子教育の重要性に気づき、女子教育を高く評価するようになり、その結果女子のための学校がアメリカ各地に設立されたと言える。

どのように教育するか、また何を教えるのかということは重要な問題である。時代とともに教育の内容は変化していく。社会が変化するために教育も変化していく。次の項目は大学における教育に関する意見である。

1901 Bryn Mawr President M. Carey Thomas declares in Educational Review that college education for women should be the same as that for men. (*A. Decades, 1900-1909*)

教育内容に関する興味深い項目である。「大学における女子教育の内容は男女ともに同じであるべき」という主張である。同じであるべき、という意見が

出されるということは現実には同じ内容の教育が行われていないということの裏返しである。20世紀の初頭という時代は男女の差違が日常生活に反映されていたはずである。家庭内においても、また実社会においても、あらゆる面で男女の差違が日常生活に影響していたはずである。家庭における男女の役割もそのひとつであるが、もっと大きな差違は職業における女性の差別待遇であっただろう。当時の社会通念を示すものが次の1904年の項目である。

1904 University of California President Benjamin Wheeler tells women students at his school that they are to prepare for marriage and motherhood and should not try to use a college education for the same purpose as men. (*A. Decades, 1900-1909*)

当時の女子学生が何をすべきか、学長が訓辞した内容の要点である。ここにははっきり大学教育の男女差が示されている。女子学生は将来の結婚の準備をし、そして母になったときのために準備せよ、という内容である。男子学生と同じ目的で就学するのではないことを明言しているのである。それが当時の社会一般の考え方であったから、学長は当然のこととして、そのような教育観をもっていたと言えよう。それは当時の社会通念の現れを意味している。

アメリカの経済的発展とともに女子教育が充実している。女子の高等教育は確かに進展している。しかしそこに何も問題がなかった、ということではない。

Most college women came from families within the expanding middle class, as the wealthy clung to the tradition of preparing their daughters for leisure, not work... In 1898 there were 32,485 women enrolled in colleges and universities, whereas in 1919-1920 there were 128,677—a fourfold increase in twenty-one years⁹.

この引用文が示すように中産階級が増大し富裕層が娘を大学へ行かせる結果になったが、高等教育を受けさせる目的は就職でなく、当時の伝統的な価値観によるものである。文中の“not work”ということばと“for leisure”ということばが目を引くだろう。これが20世紀初頭の一般的な教育観であったのである

う。

また女子大学生の数は文中に現れているように、1898年には3万人余であったのが1919-1920年度には12万人を超え4倍以上に増加しているのである。現在のように高い社会的地位を目指すための就学ではなく、一種の教養やたしなみのためというのがその主な目的だったと言えるだろう。

American Eras: 1878-1899 の“Gender Gaps”の項に次の指摘がある。社会における男女の賃金格差を示している。これは何を意味するのだろうか。

The average male teacher in the United States made \$800, while the average female elementary teacher made \$300 to \$400 per year. Nearly all teachers of younger children were women, with the grammar and high schools under the supervision of a male principal¹⁰.

ここに給与に関して大きな男女格差があったことが示されている。その差は2倍以上である。確かに20世紀初頭までに女子の高等教育はかなり進んでいることは読みとれる。しかしこの引用文中に示されているように、女子教育に対する社会的評価は低く、その意義を十分理解されているとは思えない。社会全般が女子教育の意義を高く評価していないばかりか、教育を受けた女性の評価自体が不当に低いと言わざるをえない。そのことを上の引用文の中の数字が物語っている。例えば小学校の教員の給与が男女で非常に大きく異なるということは当時の社会が女性を非常に低く評価していたことを示している。また昇進・昇給といった処遇においても女性は差別されていたことが十分に推測できよう。

男女間にさまざまな待遇上の差別があったことは事実である。それが問題化する社会風潮を生み出しただけでも教育の果たした役割は大きいと言えるだろう。そしてその男女の問題——家庭内における役割分担の改革と、社会における待遇上の男女差の解消——が解決に向かうのは後年のことである。ともかく問題が表面に浮上してきただけでも当時としては社会の大きな進歩である。

結論

時代とともに社会は変化する。それを進歩と呼ぶのが必ずしも適当でないこともある。しかしアメリカは建国以来、様々な局面で進歩している。以上に論じてきたアメリカの女子教育についても、短い歴史ながら急速な進歩をしている。

まず家庭における役割分担の男女差の問題は21世紀にまで続いているが、少しずつ性差による格差は縮減している。しかし20世紀の初頭ではまだまだ保守的であるが、ようやくジェンダーの問題が浮上してきたと言える。男女の家庭における役割が時代の推移とともに少しずつ変化している背景には教育が大きく関与している。教育によって社会風潮や社会通念が変化し、女性に対する意識が徐々に変化している。他方、社会的な待遇上の男女差の問題も21世紀に向けて少しずつ解消していったが、20世紀は家庭内問題と平行してまだまだ未解決である。しかし19世紀以前には問題にすらされなかったものが、20世紀になって社会的な立場での男女差の問題が表面化してきたのは事実である。社会全体における意識が変わることによって女性の社会的地位、職業上の（昇進、昇級等）待遇も給与の男女差も改善されていったのは事実である。また20世紀の初頭ではきわめて一部でしか、女性は高く評価されなかった。女性が正当に評価され始めたのはもっと後のことである。

しかしアメリカの歴史のなかで20世紀初頭までに、女性の社会的評価が正常なものになされなければならないという問題意識が見られるようになったことは事実である。21世紀ならば女性の市長や知事、また国会議員がいても驚かないであろうが、その状態になるまでの道のりは決して平坦なものではなかったはずである。そのような時代に至るまでに教育の果たした役割は大きいと言えるだろう。

Notes

1. Robert J. Allison ed., *American Eras: The Revolutionary Era, 1754-1783* (Detroit:

A Manly, Inc. Book, 1998), p. 141.

2. *Ibid.*, p. 136.

3. *Ibid.*, p. 137.

4. *Ibid.* p. 118.

以下、*American Eras*（以下 *AE* と略記）の各巻から年代と項目の引用については注を付すことを省略する。ただし、文章の引用については出典を注で示す。

5. Robert J. Allison ed., *American Eras: The Revolutionary Era, 1783-1815* (Detroit: A Manly, Inc. Book, 1997), p. 164

6. *AE, 1850-1877* p. 156.

エルマイラはマーク・トウェインがしばらく住んだ町で、当大学は現在マーク・トウェイン研究センターとして知られている。

7. *AE, 1878-1899*, p. 161.

8. Vincent Tompkins, ed. *American Decades, 1900-1909* (A Manly, Inc. Book, 1996), p. 139.

以下 *American Decades*（以下 *A. Decades* と略記）の各巻から年代と項目の引用については注を付すことを省略する。ただし、文章の引用については出典を注で示す。

9. Vincent Tompkins, ed. *American Decades: 1910-1919* (A Manly, Inc. Book, 1996), p. 150.

10. *AE, 1878-1899* p. 168